

桐生悠々と「御誓文」

写真は『文藝春秋』12月号、保阪正康「日本の地下水脈」17。11月9日にレポートした桐生悠々に関わることを紹介したい。

明治末期から昭和初期にかけて、軍部による言論弾圧と自由への抑圧が強まる中、反権力・反軍部の主張を果敢に掲げ続けた桐生悠々というジャーナリストがいた。明治6(1873)年に金沢の下級藩士の家に生まれた桐生は、旧制四高を経て帝国大学に進学。大阪毎日新聞、大阪朝日新聞などを転々としたのち、信濃毎日新聞の主筆に就任した。桐生は軍部の横暴を鋭く批判し続け、明治天皇を追って殉死した乃木希典陸軍大将を批判する社説も執筆した。一方で、共産主義や自分が身を置く新聞業界そのものにも舌鋒鋭く斬り込むなど、その批判精神はあらゆる対象に向けられた。



桐生の慧眼を示すエピソードがある。昭和8(1933)年8月、関東一帯で「第1回関東地方防空大演習」が開催された。桐生はこれを批判する論説「関東防空大演習を嗤ふ」を発表した。桐生は、もし空襲があったら木造住宅はひとたまりもなく、甚大な被害があるであろうことを的確に予測。「敵機を関東の空に、帝都の空に、迎へ撃つといふことは、我軍の敗北そのものである」とし、このような演習そのものに意味がないと看破したのである。桐生の見通しは、約11年後の東京大空襲で証明されるのだが、この論説は軍関係者の怒りを買って、在校軍人らによる不買運動がおきた。

桐生は信濃毎日新聞を辞めて名古屋に移り、『他山の石』という個人誌を刊行し、徹底的な軍部批判を続ける。そして「こんな畜生どもがのさばる世界で生きていないほうが幸せだ」「軍閥が倒れることを見ずして死ぬのは残念だ」といった言葉を残し、開戦直前の昭和16年9月に亡くなった。

そんな気骨のジャーナリストの根底にあったのは、社会主義や共産主義ではなく、五箇条の御誓文だった。『他山の石』の表紙の裏面に、毎号必ず五箇条の御誓文を掲げた。桐生は、日本型民主主義の基本的理念が五箇条の御誓文に込められていることを理解していた。そして、軍部がこの精神を踏みにじり、日本を破滅に導こうとしている構図を見抜いていたのである。

先のレポートで紹介した井出孫六『抵抗の新聞人 桐生悠々』岩波新書のなかで、次のように書かれている。「他山の石」の巻頭に「五箇条の誓文」が突然現われるのは、2年目に入った昭和10年(1935)5月20日発行の号からだ。たしかに、(中略) たてつけに発禁あるいは削除処分が行われていることからみれば、右に述べた防御の色彩濃いことがみてとれる。だが、歴史の彼方からはもうひとつの文脈が浮き上がってくる。

(2021年11月20日)